

情報通信技術を用いた親密なパートナーからの暴力尺度作成 および性差の検討

富山大学保健管理センター 竹澤みどり
岡山大学学生総合支援センター 松井めぐみ

Development of Intimate Partner Violence using Information Communication Technology
Scale and Examination of Gender Differences

Midori Takezawa (Center for Health Care and Human Sciences, University of Toyama)
Megumi Matsui (Center for Student Support, Okayama University)

キーワード：交際相手からの暴力，情報通信技術，尺度作成，性差

Key words: intimate partner violence, information communication technology, gender differences

要旨

インターネットや携帯電話をはじめとする情報通信技術 (ICT) の浸透によって，ICT を用いた親密なパートナーからの暴力 (IPV) が増えていることが指摘されている。本研究では，ICT を用いた IPV の被害経験を測定する尺度の作成およびその性差を検討することを目的とした。現在交際相手がいる男女を対象にインターネット調査を実施し，885 名から回答を得た。分析の結果，『嫌がらせ』『執拗なメッセージ送信』『監視』の3つの下位尺度から成る尺度が作成され，その信頼性が確認された。性差については，概ね自分が男性で交際相手も男性の場合に被害経験が高いことが明らかとなった。

問題と目的

これまでカップル間の暴力は，配偶者間で起こる暴力を扱った研究が主流であったが，近年ではそれに加え婚姻関係にないカップル間で起こる暴力に関する研究もさかんに行われている。親密な関係にあるパートナーからの暴力は，対象との関係性に応じて，研究者によってさまざまな名称で呼ばれている。特に，配偶者間で起こる暴力は Domestic Violence と呼ばれ，交際相手との間で起こる暴力は Dating Violence と呼ばれることが多い。Dating Violence は日本においては，デート DV と呼ばれることが多い。一方，婚姻関係のあるなしにかかわらず親密なパートナーとの間に起こる暴力として，包括的に Intimate Partner Violence (IPV) と呼ばれることが増え，定着し

つつあることから，本研究でも IPV という用語を用いる。IPV は，身体的暴力による身体への物理的な被害だけではなく，うつ病や PTSD といった精神疾患をもたらすなど精神面への影響も大きく (Basile, Arias, Desai, & Thompson, 2004; 加茂・氏家・大塚, 2004; Pico-Alfonso, 2005), 予防・啓発活動の実施や早期介入が重要であると考えられる。内閣府 (2015) の調査によると，これまでに交際相手がいいた(または現在いる)人のうち，“身体的暴行”が「10～20歳代にあった」と回答した人が6.0%，「30歳以上にあった」と回答した人が1.5%であった。“心理的攻撃”は「10～20歳代にあった」と回答した人が8.2%，「30歳以上にあった」と回答した人が1.8%，“経済的圧迫”は「10～20歳代にあった」と回答した人が2.3%，

「30歳以上にあった」と回答した人が0.9%、「性的強要」は「10～20歳代にあった」と回答した人が3.8%、「30歳以上にあった」と回答した人が0.4%であり、若年層に被害経験者が多いことがうかがえる。

一方で、近年のICT (Information Communication Technology) の進歩は目覚ましく、日本においても若者を中心に急速に普及している。このようなICTの発展と普及によって、IPVにICTが用いられることも多くなっている。Melander (2010) は、このような新しい形態の暴力にはこれまで研究されてきた対面での暴力と同じ側面もあるが、異なる特徴を持つ側面も存在するため、このような新しい形態の暴力をも考慮に入れた調査が必要であると指摘している。しかし、ICTを用いたIPVに焦点を当てた研究は未だ少ない。海外においても近年研究が行われ始めたばかりであり、日本においてはほとんど研究が行われていないのが現状である。竹澤・松井 (2016) は、海外での先行研究 (Zweig, Dank, Yahner, & Lachman, 2013; Bennett, Guran, Ramos, & Margolin, 2011; Burke, Wallen, Vail-Smith, & Knox, 2011; Helsper & Whitty, 2010など) を基に、これまでに交際相手がいた人を対象に、日本におけるICTを用いたIPVの実態とその特徴を検討している。その結果、概ね海外で指摘されているICTを用いたIPV行為が日本においても行われていることを示した。さらに、各行為が日本では具体的にどのように行われているかについても自由記述調査によって明らかにしている。本研究では、竹澤・松井 (2016) の自由記述調査及び先行研究 (Zweig et al., 2013; Bennett et al., 2011; Burke et al., 2011; Helsper & Whitty, 2010) を基に、ICTを用いたIPV被害を測定する尺度を作成することを第一の目的とした。そしてICTが若者を中心に広がっていることや、早期介入が重要であるという点などから、本研究においては婚姻に至る前の交際関係におけるICTを用いたIPVに焦点を当てることとする。

また、交際相手からの暴力において、国内の研

究では精神的暴力や身体的暴力の加害経験及び被害経験において一貫した性差は得られておらず (赤澤, 2016), どちらかの性が一方的に被害者、加害者であるとは言えないことが指摘されている (西岡・小牧, 2009)。一貫した結果が得られていない原因の一つとして、赤澤 (2016) は国内の多くの研究で、異性愛者か同性愛者かについて尋ねられていないにもかかわらず、異性愛という前提で性差が検討されていることの問題を指摘している。海外では、同性のカップルなど性的マイノリティに焦点を当ててIPVを検討している研究が数多く存在する。Martin・Storey (2015) は先行研究から、大学生を対象とした調査においては、多くの場合異性愛の学生よりも性的マイノリティの学生において、カップル間における暴力の経験頻度が高いことを示している。さらに、青年期の男女を対象とした調査においても同様の結果を示している。また、成人を対象とした研究においても、異性愛のカップルよりも性的マイノリティのカップルにおいてIPVが起りやすいことが示されている (Messinger, 2011)。IPVの発生に関わる要因は性的マイノリティのカップルでも異性愛のカップルにおいても多くの点で類似しているが、性的マイノリティのカップルに特有の要因についても考慮することが重要であると指摘されている (Balsam & Szymanski, 2005)。その一つが、マイノリティ・ストレスである。Meyer (2003) は、偏見や侮辱などによるストレスが高まり、その結果として彼らの精神的健康を害することにつながったり、問題行動の生起につながりうることを指摘している。IPV研究においては、マイノリティ・ストレスの高さはIPVの被害と加害のどちらとも関連することが示されている (Balsam & Szymanski, 2005)。しかし、国内のIPV研究において同性のカップルを考慮した研究はほとんど行われておらず、日本における実態は明らかにされていない。そこで、自身の性別と交際相手の性別によってICTを用いたIPV被害の経験が異なるのかを検討することを第二の目的とした。

方法

調査対象者と手続き

本研究では、携帯やスマートフォン、インターネット上のSNSなどを用いた行為に関する調査である点をふまえて、インターネット調査を実施した。インターネット調査会社の保有するモニターから、現在交際相手がいる15歳から29歳の結婚していない男女を対象にインターネット調査を実施し、885名（自分が男性・恋人が男性43名、自分が男性・恋人が女性360名、自分が女性・恋人が男性460名、自分が女性・恋人が女性22名）から回答を得た。平均年齢は24.9歳 ($SD=3.28$) であった。また、現在の交際相手との平均交際期間は24.9ヵ月 ($SD = 27.56$) であった。

調査内容

自身と交際相手の性別、現在の交際相手との交際期間、年齢に加え、以下の尺度について回答を求めた。

ICTを用いたIPV被害尺度（以下「I-IPV被害尺度」）：竹澤・松井（2016）では先行研究（Zweig et al., 2013; Bennett et al., 2011; Burke et al., 2011; Helsper & Whitty, 2010）から、ICTを用いたIPV行為には大きく分けて、以下の6種の行為が存在することを示した：(a) 携帯やパソコン、インターネット上のサイト等を利用して、交際相手の言動を監視する「言動監視」、(b) メールなどのテキストメッセージを執拗にたくさん送る「執拗なメッセージ送信」、(c) 交際相手を怖がらせたり、侮辱したり傷つけたりするような内容を、インターネット上の掲示板等に書き込んだりメール等のテキストメッセージで送信する「脅迫・侮辱」、(d) 交際相手になりすまして、交際相手のメールやID等を勝手に用いて、困らせるようなことをする「なりすまし」、(e) インターネット等を利用して交際相手の情報を探し出し、それを用いて相手を傷つけたり攻撃したりする「私的情報等による攻撃」、(f) インターネット上に交際相手が嫌がるような情報や写真をアップするなどの「私的情報の掲載」。さらに、これらの行為について日本において具体的にど

のように行われているのかを自由記述によって検討している。本研究では、上記の先行研究（Zweig et al., 2013; Bennett et al., 2011; Burke et al., 2011; Helsper & Whitty, 2010）および竹澤・松井（2016）で行った自由記述調査の内容を参考に、「言動監視」（12項目）、「執拗なメッセージ送信」（7項目）、「誹謗中傷」（6項目）、「脅迫」（9項目）、「プライベートの暴露」（6項目）、「なりすまし」（7項目）の6種の行為を測定する予備尺度をそれぞれ作成した。「言動監視」「執拗なメッセージ送信」は上記の先行研究に加えて、竹澤・松井（2016）の6種の行為のうちの“言動監視”、“執拗なメッセージ送信”の自由記述の内容を基にそれぞれ項目案を作成した。「誹謗中傷」は先行研究に加えて、6種の行為（竹澤・松井，2016）の“脅迫・侮辱”や“私的情報等による攻撃”の自由記述の内容のうちの相手を非難したり傷つけるような行為、同様に「脅迫」は相手を脅すような行為を基に項目案を作成した。「プライベートの暴露」「なりすまし」は竹澤・松井（2016）での“6種の行為以外の行為”に関する自由記述の内容や先行研究を基に項目案を作成した。「プライベートの暴露」にあたる行為は、竹澤・松井（2016）では“私的情報の掲載”と命名していたが、本研究ではより広く相手のプライベートな情報や写真をインターネット上に曝す行為として名称を変更した。6種の行為（竹澤・松井，2016）のうちの“私的情報等による攻撃”は「プライベートの暴露」や「誹謗中傷」にも含まれる行為と考えられたため、本調査では他の行為に吸収されている。現在の交際相手からの被害経験について5件法（「一度もない」「1-2回」「3-5回」「6-10回」「11回以上」）で回答を求めた。

倫理的配慮

回答は統計的に処理され個人が特定されることはないこと、研究目的以外に利用することはないこと、調査への協力は自由意志に基づくもので回答しなくても不利益をこうむることがないことをトップページに記載した。

調査時期

2014年1月10日から15日であった。

結果

I-IPV被害尺度について、主因子法プロマック

ス回転による探索的因子分析を行った。いずれの因子にも負荷量の低い(.40未満)1項目を削除して再度因子分析を実施し、解釈可能性から3因子を抽出した(Table1)。第1因子は「誹謗中傷」「脅迫」「プライベートの暴露」「なりすまし」の全て

Table1 I-IPV被害尺度の探索的因子分析結果(主因子法プロマックス回転)

		F1	F2	F3	M	SD
F1 嫌がらせ(α=.99) 30項目						
プライベートの暴露	あなたを辱めるようなあなたの写真を勝手にインターネット上にアップされた	.99	.00	-.12	1.14	.57
なりすまし	あなたのIDを使ってログインして、ネット上の知人にあなたのプライベートを勝手に伝えられた	.98	-.11	.00	1.14	.59
なりすまし	勝手にあなたになりすまし、他の人にメールやメッセージを送られた	.98	-.12	.01	1.14	.60
脅迫	あなたに暴力をふるうことをほのめかす電話が携帯にかかってきた	.97	-.03	-.06	1.14	.59
なりすまし	他人になりすまして、あなたを脅迫する内容のメッセージを送られた	.97	-.08	-.02	1.15	.61
プライベートの暴露	あなたを辱めるようなあなたの写真を勝手にほかの人にメールで送られた	.97	-.03	-.07	1.15	.61
なりすまし	勝手にあなたになりすまし、あなたの知人とインターネット上でやり取りされた	.96	-.09	.02	1.15	.61
プライベートの暴露	あなたとのメールやLINE等でのやり取りを勝手にネット上にアップされた	.96	-.02	-.08	1.15	.57
プライベートの暴露	あなたに関する嘘の情報を勝手にインターネット上に流布された	.92	.03	-.06	1.15	.62
脅迫	あなたの知人を傷つけることをほのめかす電話が携帯にかかってきた	.92	.04	-.02	1.14	.59
脅迫	インターネット上であなたを脅すような内容の書き込みをされた	.91	.02	-.01	1.15	.59
なりすまし	あなたのインターネット上のプロフィールを勝手に変更された	.91	-.05	.01	1.15	.61
誹謗中傷	あなたが嫌がるような、あなたに関する嘘の情報を記載したメッセージをあなたの知人に送られた	.90	.03	.01	1.15	.59
脅迫	あなたに暴力をふるうことをほのめかすメッセージを送られた	.89	.00	.00	1.16	.62
なりすまし	あなたのIDやパスワードを調べ、勝手にログインしてあなたのメールをチェックされた	.89	-.17	.15	1.14	.60
プライベートの暴露	あなたとのプライベートについて勝手にインターネット上に書き込まれた	.88	.03	-.04	1.17	.65
誹謗中傷	あなたが嫌がるような、あなたに関するウソの情報をインターネット上に書き込まれた	.87	.03	-.01	1.15	.59
脅迫	あなたに卑猥な写真を送るよう強要するメールを送られた	.85	.00	.03	1.17	.64
プライベートの暴露	あなた(と恋人)との会話の内容を勝手にインターネット上に書き込まれた	.84	.01	.03	1.17	.63
脅迫	あなたの知人を傷つけることをほのめかすメッセージを送られた	.84	.07	.02	1.15	.60
なりすまし	他人になりすまして、インターネット上であなたと交流してあなたの言動をチェックされた	.82	-.07	.13	1.16	.61
脅迫	自傷・自殺をほのめかすメッセージを送られた	.73	.26	-.16	1.17	.66
脅迫	自傷・自殺をほのめかす電話が携帯にかかってきた	.70	.23	-.07	1.19	.69
脅迫	あなたを脅すような内容のメッセージを送られた	.69	.15	.04	1.16	.63
誹謗中傷	あなたを誹謗中傷するような内容のメッセージをあなたの友人に送られた	.67	.15	.14	1.15	.58
言動監視	インターネット上であなたを誹謗中傷するような書き込みをされた	.62	.21	.12	1.16	.60
言動監視	GPSを用いてあなたの行動を監視された	.54	.02	.36	1.17	.63
誹謗中傷	あなたを誹謗中傷するような電話がかかってきた	.50	.32	.08	1.19	.70
誹謗中傷	あなたを誹謗中傷するような内容のメッセージを送られた	.50	.31	.09	1.18	.64
言動監視	あなたのインターネット上の行動に付きまどわれた	.46	.15	.37	1.19	.68
F2 執拗なメッセージ送信(α=.96) 7項目						
執拗なメッセージ送信	会うことを要求する電話が執拗にかかってきた	.05	.94	-.14	1.28	.83
執拗なメッセージ送信	「(あなたが)今、誰と一緒にいるのか」と執拗に携帯に電話がかかってきた	-.03	.92	-.08	1.32	.84
執拗なメッセージ送信	返信を要求するメッセージを執拗に送られた	-.06	.89	.03	1.30	.83
執拗なメッセージ送信	会うことを要求するメッセージを執拗に送られた	.11	.84	-.03	1.26	.77
執拗なメッセージ送信	「(あなたが)今、誰と一緒にいるのか」を問うメッセージを執拗に送られた	-.04	.83	.08	1.27	.77
執拗なメッセージ送信	「(あなたが)今、どこで、何をしているのか」と執拗に携帯に電話がかかってきた	-.12	.82	.15	1.36	.92
執拗なメッセージ送信	「(あなたが)今、どこで、何をしているのか」を問うメッセージを執拗に送られた	-.03	.74	.16	1.31	.86
F3 監視(α=.93) 9項目						
言動監視	インターネット上の書き込み内容を逐一チェックされた	-.22	-.09	.87	1.40	.98
言動監視	あなたのインターネット上での交友関係をチェックされた	.00	.03	.86	1.28	.77
言動監視	インターネット上のあなたの友人の書き込みからあなたの言動をチェックされた	.05	-.05	.83	1.32	.85
言動監視	インターネット上の交友関係に干渉された	.00	-.05	.82	1.31	.80
言動監視	ログイン履歴や書き込み日時をチェックされた	.00	-.01	.74	1.30	.85
言動監視	あなたの携帯メールを勝手に見られた	.01	.14	.60	1.32	.81
言動監視	インターネットを用いてあなたの名前を検索され、あなたの写真や情報をチェックされた	.25	.10	.57	1.24	.73
言動監視	あなたの携帯メールを見せるよう要求された	.06	.26	.51	1.30	.81
言動監視	あなたのパソコンのブラウザの履歴をチェックされた	.28	.09	.49	1.22	.72
		F1	—	.69	.70	
因子間相関		F2	—	.75		
		F3		—		

Table2 I-IPV 被害尺度の性差

	自分が男性		自分が女性		自分の性別 主効果		交際相手の性別 主効果		交互作用	
	交際相手が男性 n=43	交際相手が女性 n=360	交際相手が男性 n=460	交際相手が女性 n=22	F値	η^2	F値	η^2	F値	η^2
嫌がらせ	49.37 (28.18)	35.18 (17.10)	33.06 (13.26)	33.73 (11.81)	17.01 ***	.02	9.86 **	.01	11.91 **	.01
					男性>女性		男性<女性		自分が男性:交際相手が男性>交際相手が女性 交際相手が男性:自分が男性>自分が女性	
執拗なメッセージ送信	12.35 (7.77)	9.15 (5.26)	8.77 (4.63)	9.05 (6.04)	7.01 **	.01	4.45 *	.01	6.26 *	.01
					男性>女性		男性<女性		自分が男性:交際相手が男性>交際相手が女性 交際相手が男性:自分が男性>自分が女性	
監視	14.77 (8.16)	11.88 (6.25)	11.36 (5.32)	10.14 (2.59)	10.62 **	.01	6.74 *	.01	1.10	.00
					男性>女性		男性<女性			

df=1, 881

と「言動監視」の一部の項目が含まれていた。概ね、交際相手を困らせたり傷つけたりするような行為が含まれており『嫌がらせ』因子と命名した。第2因子は「執拗なメッセージ送信」の全ての項目が含まれており『執拗なメッセージ送信』と命名した。第3因子は「言動監視」項目のみが含まれており、『監視』と命名した。内的整合性の検討のため、下位尺度ごとの α 係数を算出したところ .93 - .99 と高い値が得られた。

自身及び交際相手の性別によって被害経験に違いがみられるかを検討するために、I-IPV 被害尺度のそれぞれの下位尺度を従属変数とした、自身の性別×交際相手の性別の2要因分散分析を行った (Table2)。その結果、『嫌がらせ』『執拗なメッセージ送信』では自身の性別の主効果、交際相手の性別の主効果、交互作用が有意であった。交互作用に基づき単純主効果検定を行った結果、自分が男性の場合には交際相手が男性のほうが尺度得点が高く ($p<.001$)、交際相手が女性の場合には自身が男性のほうが尺度得点が高かった ($p<.001$)。『監視』では、自身の性別の主効果が有意であり、男性のほうが女性よりも得点が高かった。さらに、交際相手の性別の主効果も有意であり、交際相手が男性のほうが女性よりも得点が低かった。

考察

本研究では、ICTを用いたIPVを測定するための尺度を作成し、自身および交際相手の性別によって被害経験に差が出るかを検討することを目的とした。

作成した尺度の因子構造を検討した結果、「誹謗中傷」「脅迫」「プライベートの暴露」「なりすまし」の項目が第一因子『嫌がらせ』にまとまった。これらの行為は、相手に不利益または害を与えることを意図した行為であるといえる。一方で、第二因子『執拗なメッセージ送信』、第三因子『監視』も相手に不利益や害を与える行為ではあるが、行為者の意図としては交際相手の行動を把握することを意図した行為とも言えるだろう。各項目の平均値をみると、最も高い項目でも1.40であり、多くの人がそのような被害を現在の交際相手から受けていないことが明らかとなった。3因子ごとに各項目の平均値を見てみると『嫌がらせ』は1.14~1.19、『執拗なメッセージ送信』は1.26~1.36、『監視』は1.22~1.40となっており、比較的『嫌がらせ』よりも『執拗なメッセージ送信』や『監視』の方が行われやすいことがうかがえた。交際相手のことを知りたいと思うことは、恋人関係においては比較的一般的な気持ちであるとも考えられる。そのため、『執拗なメッセージ送信』や『監視』の方が頻繁に起こりやすいと推測された。本研究では下位尺度ごとの α 係数を算出し、各下位尺度の信頼性は確認された。しかし、妥当性については検討されていない。今後は、構成概念妥当性等についても検討を行う必要があるだろう。

ICTを用いたIPV被害経験における自身の性別および交際相手の性別による違いを検討した結果、すべての下位尺度において両者の性別による違いが見られた。3つすべての下位尺度において、概ね自分が男性で交際相手も男性の場合に被害経験が高いことが明らかとなった。先行研究におい

て、性的マイノリティのカップルにおいてIPVが発生しやすいことが指摘されているが、ICTを用いたIPVに焦点を当てた本研究では男性同士のカップル以外では大きな違いが見られなかった。Buller, Devries, Howard, & Bacchus (2014)は近年の先行研究では、特に男性同士のカップルにおいてIPV被害経験が高いことを指摘しており、本研究の結果と一致している。男性のほうが同性愛に対してポジティブなイメージを持たず、心理的距離を取っており、特に男性は男性の同性愛者に対して心理的距離を置きやすいため(和田, 1996), 男性の同性愛者の方がマイノリティ・ストレスが大きい可能性が考えられる。マイノリティ・ストレスの高さはIPVの加害傾向を高めることから(Balsam & Szymanski, 2005), 男性同士のカップルにおいて、ICTを用いたIPVも生起しやすいことが推測された。しかし、本研究ではマイノリティ・ストレスについては測定していないこと、マイノリティ・ストレスとIPVとの関連を指摘している先行研究はすべて海外における研究であることから、今後は日本におけるマイノリティ・ストレスを考慮してIPVおよびICTを用いたIPV生起の違いを検討することが必要であろう。ただし、本研究では『監視』においては交互作用が見られず、恋人が女性の場合に被害経験が高いことが示され、女性の方が男性に比べて『監視』行為を行いやすいことが明らかとなった。

本研究のまとめと今後の課題

本研究では、近年急速に普及し、主要なコミュニケーションツールとなっているICTを用いたIPVに焦点を当てて、その被害経験を測定する尺度の作成およびその性差を検討した。その結果、『嫌がらせ』『執拗なメッセージ送信』『監視』の3つの下位尺度から成る尺度が作成され、その信頼性が確認された。性差については、概ね自分が男性で交際相手も男性の場合に被害経験が高いことが明らかとなった。

次に、本研究の今後の課題について述べる。既

述している通り、作成した尺度の妥当性の検討およびIPV生起におけるマイノリティ・ストレスの影響を検討することが課題である。加えて、本研究では性的マイノリティにも焦点を当てて性差を検討した。しかし、本研究では自身の性別と交際相手の性別からのみ検討しており、性的アイデンティティについては尋ねていない。そのため、性的マイノリティの一つであるバイセクシャルについては検討できておらず、異性のカップルの中にはヘテロセクシャルとバイセクシャルが混在していることが考えられる。ゲイに比べてバイセクシャルのほうがIPV被害経験率が高いことを示す先行研究もあり(Messinger, 2011), 性的マイノリティに焦点を当てる場合にはバイセクシャルにも焦点を当てることが重要である。さらに、性的アイデンティティと行動(性的パートナーが異性か同性か)は異なる場合もあることも指摘されており(Young & Meyer, 2005; Baker, Buick, Kim, Moniz, & Nava, 2013; Finneran & Stephenson, 2013), 今後は性的アイデンティティも含めた検討を行う必要があるだろう。

引用文献

- 赤澤 淳子 2016 国内におけるデートDVのレビューと今後の課題 人間文化学部紀要, 16, 128-146.
- Baker, N. L., Buick, J. D., Kim, S. R., Moniz, S., & Nava, K. L. 2013 Lessons from examining same-sex intimate partner violence. *Sex Role*, 69, 182-192.
- Balsam, K. F., & Szymanski, D. M. 2005 Relationship quality and domestic violence in women's same-sex relationships: The role of minority stress. *Psychology of Women Quarterly*, 29, 258-269.
- Basile, K. C., Arias, I., Desai, S., & Thompson, M. P. 2004 The Differential Association of Intimate Partner Physical, Sexual, Psychological, and Stalking Violence and Posttraumatic Stress Symptoms in a

- Nationally Representative Sample of Women. *Journal of Traumatic Stress*, **17**, 413-421.
- Bennett, D. C., Guran, E. L., Ramos, M. C., & Margolin, G. 2011 College students' electronic victimization in friendships and dating relationships: Anticipated distress and associations with risky behaviors. *Violence and Victims*, **26**, 410-429.
- Buller, A. M., Devries, K. M., Howard, L. M., & Bacchus, L. J. 2014 Associations between Intimate Partner Violence and Health among Men Who Have Sex with Men: A Systematic Review and Meta-Analysis. *PLOS Medicine*, e100169..
- Burke, S. C., Wallen, M., Vail-Smith, K., & Knox, D. 2011 Using technology to control intimate partners: An exploratory study of college undergraduates. *Computers in Human Behavior*, **27**, 1162-1167.
- Finneran, C., & Stephenson, R. 2013 Intimate partner violence among men who have sex with men: A systematic review. *Trauma Violence Abuse*, **14**, 168-185.
- Helsper, E. J., & Whitty, M. T. 2010 Netiquette within married couples: Agreement about acceptable online behavior and surveillance between partners. *Computer in Human Behavior*, **26**, 916-926.
- 加茂登志子・氏家由里・大塚佳子 2004 ドメスティック・バイオレンス被害と人格への影響
トラウマティック・ストレス, **2**, 5-12.
- Martin-Storey, A. 2015 Prevalence of dating violence among sexual minority youth: Variation across gender, sexual minority identity and gender of sexual partners. *Journal of Youth Adolescence*, **44**, 211-224.
- Melander, L. A. 2010 College students' perceptions of intimate partner cyber harassment. *Cyberpsychology, Behavior, and Social Networking*, **13**, 263-268.
- Messinger, A.M. 2011 Invisible victims: Same-Sex IPV in the national violence against women survey. *Journal of Interpersonal Violence*, **26**, 2228-2243.
- Meyer, L. H. 2003 Prejudice, social stress, and mental health in lesbian, gay, and bisexual populations: Conceptual issues and research evidence. *Psychological Bulletin*, **129**, 674-697.
- 内閣府 2015 男女間における暴力に関する調査報告書（平成27年3月） <http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/pdf/h26danjokan-6.pdf>（2017年3月22日）
- 西岡敦子・小牧一裕 2009 「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」に関する調査Ⅷ 第2報—デートDVにおける男女差について— 国際研究論叢, **22**, 25-39.
- Pico-Alfonso, M. A. 2005 Psychological intimate partner violence: the major predictor of posttraumatic stress disorder in abused women. *Neuroscience and Biobehavioral Reviews*, **29**, 181-193.
- 竹澤みどり・松井めぐみ 2016 情報通信技術を用いた交際相手からの暴力—日本における実態とその特徴の検討— 学園の臨床研究, **15**, 11-24.
- 和田 実 1996 青年の同性愛に対する態度：性および性役割同一性による差異— 社会心理学研究, **12**, 9-19.
- Young, L. M., & Meyer, I. H. 2005 The trouble with “MSM2 and “WSW” : Erasure of the sexual-minority person in public health discourse. *American journal of public health*, **95**, 1144-1149.
- Zweig, J. M., Dank, M., Yahner, J., & Lachman, P. (2013). The rate of cyber dating abuse among teens and how it relates to other forms of teen dating violence. *Journal of Youth and Adolescence*, **42**, 1063-1077.

付記

本研究は日本学術振興会科研費（課題番号
24730572）の助成を受けた。